

浄土

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別授承認雑誌）第三二五号
昭和四十九年九月二十五日印刷 昭和四十九年十月一日発行

第四上

第十号



1974
10

諦観



工藤昌瑞
書



諦 観

工 藤 昌 瑞

(青森県弘前市西光寺住職)

私の好きな字句の一つです。若い頃ゲーテの諦念に傾倒したことがあります。諦念は、「あきらめ」のさとりであります。諦観となると真理のさとりとなります。仏典の随処にこの諦観、或は諦聴の字句が出て来ます。

諦観はすべての事理の根源をよくよく観察することであり、諦観の上に立つた判断は正しい行動を導くこととなります。諦観しない、又諦聴しない所に誤解があり認識不足があります。いよいよ複雑多岐になって行く現象界には、ますますこの諦観が必要になって行くことと私自身思っているわけです。

十 月 号



目

次

諦 観	工 藤 昌 瑞
現代思想と仏教	金 岡 秀 友…(2)
十夜法話 法然上人の心	津 村 諦 堂…(6)
私の好きな本	
仏教から基督へ	吉 田 光 覚…(10)
新定 法然上人絵伝	牧 達 雄…(12)
話しのくず籠 情操	…(15)
特集 釈尊の十大弟子	…(16)
舍利弗・大目犍連・大迦葉・須菩提・富楼那	
迦旃延・阿那律・優波離・羅睺羅・阿難	
法然上人霊場めぐり⑨	村 上 博 了…(26)
第15番札所源空寺・第16番札所光明寺	
経典に聞くシリーズ⑧ 仏説無量寿経巻下<2>	村 瀬 秀 雄…(32)
念仏ひじり三国志⑥ 法然上人をめぐる人々	寺 内 大 吉…(37)
浄土宗の宝物 「桜と小禽図」	佐々木 洋 之…(48)

表紙 久住 静雄画



現代思想と仏教

金岡秀友

(東洋大学文学部長)

—

現代社会の思想を一口でいうことはむづかしいが、人間中心主義と合理主義と個人主義の三つはその柱といふことができる。なぜならこの三つは、現代社会のもとをなす近代のはじまりとなったルネッサンスの三つの基本的精神だったからである。

したがって、いまここで、私が「現代社会と仏教」ということを考えるとすれば、これら三つの精神と仏教との触れ合いを問題にしなければならないのであろうが、とてもそれだけの紙数もないのであるから、ここでは、

現代思想の病氣、ことに日本にみられる現代思想の病氣と仏教との関係に限って考えてみたい。

このように考えてみたいのは、いくつかの理由がある。

まず一つには、現代の社会、従って現代の思想を、ヨーロッパはルネッサンス以来四〇五百年の歴史をかけてつくり出して来た。その間に、もちろん、ヨーロッパ人は良いことばかりして来たわけではない。スペイン人がインカ帝国に、アメリカ人がインディアンに、イギリス人がインド人に何をしたかは、改めていうまでもないところだろう。日本人の侵略も弁護することはできないけれども、しかし、ヨーロッパ人もきれいな手をしているわけではない。いやもっと汚れている。「誰かこの女を

石もて打てるものぞ」である。しかし、日本人が急いだことは事実であった。だから無理も一倍大きかった。今日、日本人が受けている「高度経済成長」や「エコノミックス・アニマル」という非難は、結局、ヨーロッパに追いつけ追いつけから来た、日本人のあせりのひずみというほかない。

第二に、ヨーロッパ人はたしかにいいことばかりして今日見るような発展をとげたのではない。しかし、少くも一つ、彼らはいいことをしている。それは、彼らは利益追求をしながらも、つねに反省はしていた、という一点である。

しかもその反省は極めて深刻で真面目なものがあつた。誰が見ていても見ていなくても、守るべきことは守るといふ、宗教的な反省は、ヨーロッパ人の心の奥底に常に息づいていたことは忘れてはならない。デフォアの『ロビンソン・クルソー』に見られるように、だれ一人見えない絶海の孤島でも、彼は真に倫理的であつたことを想起してもらいたい。

一人でいようと、二人でいようと、することに於いて、いうことにおいても二通り三通りの顔をもたない。

われわれはこういう性向を「正直」と呼ぶであろう。自分のうちに「正直」という徳をもつ人は、外に對して「信用」という徳を示しうることは夏目漱石がかつて明らかにしたところである（私の個人主義）。また、マックス・ウェーバーに従えば、プロテスタンティズムのもつ「禁欲」の美德は、ただ物質と資本の蓄積を可能にしただけにとどまらず、経済活動に従うひとびとに質素と正直と信用という内面的価値の蓄積を教え、これが資本主義の推力となつたという（プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神）。

日本の資本主義、日本の資本家には、このような倫理や宗教の根底がないということがしばしば指摘される。あるかないかは軽々にいえないにせよ、少くもキリスト教精神を母胎として育つた、ヨーロッパの資本主義と、同じ歴史的條件になつたことだけはたしかである。

二

日本の現代思想には、いま見たような、焦燥感と、宗

教的反省を欠いた物質第一主義が強く流れているように思われる。

第一の点は、明治以来敗戦までは、「富国強兵」という、国家的規模での産業開発と軍国主義として発達させられた。敗戦後は、その国家的経営は企業体に移行し、個人の生活設計への焦慮感、つよい貯金意欲などを榮養として、所得倍増・高度成長という路線で今日に至っている。

「奇跡の復興」ということがいわれるが、あの未曾有の敗戦を経験し、国土の大半を焦土にしつつ、明治以来の資本主義的発展が一敗地に塗れることなく、不死鳥のごとく生き残っているのは、たしかに奇跡というほかない。

しかし、第二の点は、もう一度考え直して見る必要がある。

よく一部の人はいう。日本が、インドやその他のアジア諸国と異なり、早くから、しかも大規模に、ヨーロッパに追いつき追いこす大産業国家・資本主義国家となったのは、アジア諸国で強く制扼として働いているような、宗教的禁忌がなかったからだ、という。果してそうであ

ろうか。

インドなどを見ると、たしかに、カーストその他、産業の発達に妨げとなりそうな宗教的禁忌は沢山ある。しかし、インドに資本主義が育ちえなかったのが、資本主義と矛盾する宗教のためか、イギリスの長い植民地経営のためかは、いまさら改めていうまでもないことと思う。前者は後者のために利用された一要因にすぎないともるべきである。

もう一つこれに加えて、中国のことを考えてみたい。中国には、ほとんどタブーとして働くような宗教的制扼はなかったではないか。それにもかかわらず、中国でも、日本にくらべて、資本主義の発展は極めておそく、且つ跛行的なものがあつた。ここでも、宗教的理由に先行する政治的理由のあつたことを率直に認めるべきであろう。

三

思うに、産業・資本主義を育てる上で、宗教が妨げと

なるかどうかという問題設定は正確ではない。どのような宗教が産業を育て、どのような宗教は妨げとなるかと問ひ直すべきであろう。

プロテスタンティズムは資本主義を育て、現代思想を育てたのであった。

では、この点で仏教はどうだったのであろうか。

私は、仏教は現代思想——この場合、資本主義精神に限っていう——を育て導びく力をもっていると思う。それは内在的であり、抽象的ではあるが、正しく作用するときは、明らかに資本主義の推進力たりうる原理を内蔵している。

それは何か。

一口でいえば、勤労と求道の同一性を、仏教は確認した宗教だった、ということである。世俗における活動と、宗教上の活動に上下を立てず、両者は究極において一致することは、釈尊が、はつきりと、教団の非生産性を攻撃したバラモンに説示したところであった。「田を耕すものと心に耕すもの」の同価値は、以来、一貫した仏教の精神であった。

直接的な財物の生産と分配（財施さいし）も、間接生産や精

神労働（法施ほっし）も、価値の懸程はまったくない（財法の二施平等）。平常の心がそのまま仏教である（平常心是れ道）。毎日の生産活動・産業活動がそのまま仏の道に連なる（資生産業ししようさんぎんざん是仏法ぶつぽう）。

『法華経』その他、多くの大乘經典は、この精神の上に立ち、世俗の生産活動に、宗教的・倫理的根底を打ちたてて来た。これが完全に作用するかぎり、仏教は充分、資本主義の推進力たりえたはずであった。しかるに、現実には、日本の資本主義は仏教との接点をもち、それを内に生かしているとは、ひいきめに見てもいえないようである。「日本には他のアジア諸国におけるような宗教的タブーがなかったから資本主義が育った」というのはいいすぎであるが、仏教が資本主義を育てたのではないこともまた事実である。

その理由の一つ。ここでもまたわれわれは、仏教のもつ永遠の価値（法）を、現代という時代（機）に即して完全に活かし得ていないからである。仏教が現代思想に応えるものをもっていないのではない。われわれが、現代思想に応えうるように、仏教を活かしていないのである。



十夜法話

法然上人の心

津村諦堂

(秋田県角館町報身寺住職)

法然上人の教えの基底とも言える心は、罪惡深重、煩惱具足の凡夫たる私共が称名念仏を修することによって西方極樂浄土に生ることが出来る凡入報土即ち易行浄土門の教えなのであります。

法然上人はこのことを、

「われ浄土宗を立つる心は凡夫の報土に生ることを示さんが為なり。もし天台によれば凡夫浄土にむまるとをゆるしに似たれども浄土を判ずること浅し、もし法相によれば浄土を判ずることふかしと云へども凡夫の往生をゆるさず。諸

宗の所談ことなりといへども、すべて凡夫報土にむまるとをゆるさざるがゆえに善導の釈義によりて浄土宗をたつるとき、すなはち凡夫報土にむまるとあらはるるなり」といっておられます。

即ち天台、法相等の聖道門に於ては煩惱罪障等の凡ての人間の条件を除去した初地以上の境地に達した菩薩にして始めて報土に生れ報身を見ることが出来るとするものであつて煩惱具足の凡夫はその資格を得ないとするものでありますが、法然上人の説く浄土門に於

ては、このような凡夫でも称名念仏を修することによつて報土に生れることが出来るという易行往生の教えなのであります。

このように法然上人の教えは凡入報土を説くのでありますが、このことから法然上人の心は仏、菩薩と十惡五逆の凡夫とを區別しているように思われますが、然し法然上人の真意は決して差別觀に立っているのではないのであります。

法然上人の教えの根拠となつてゐる弥陀の四十八願の中には仏や菩薩を対象としている願もあり、迦才は「淨土宗意本為凡夫兼為聖人」と云つており又元曉も同じような意味のことを云つてゐるのであります。

然し法然上人の無差別觀の根拠となつてゐるものは法然上人の偽らざる人間觀察の確心であると考えられます。つまり人間の條件を悉く斷除し得たものを仏、菩薩、聖者とし、然らざるものを愚痴、罪惡の凡夫と區別することには法然上人は否定的考へに立つていたように思われます。それは人間が人間の條件

を斷除して仏、菩薩、聖人に成ることは絶対に不可能であると云う遠觀に立つていたからであると思われます。結局法然上人は人間は一人残らず愚痴無智、罪惡深重の下根者であるという確信に立つていたものと考えられます。

その為法然上人の教えは聖道門的難行によつて教われ得なかつた人々に希望と光と安心を与える、云い換えれば罪惡深重、煩惱具足、愚痴無智とよばれる人々を救ひの正客とした惡人正機の教えなのであります。

然しそれは無智罪惡者だけを對象とし、有智善人を除くものではないのであります。

「念仏の行は本より有智無智に限らず、弥陀の昔誓ひ給ひし本願もあまねく一切衆生の為なり。無智の為には念仏を願ふことなし、有智無智、善人惡人、持戒持律、かしこきもいやしきも皆こもれるなり」

と言つてゐるように人間すべてを對象とし

ているものであることがわかります。

然も人間には眞の智者、善人、持戒持律者などという者は一人もなく、すべて無智、悪人、罪人であるという心であったと思われまゝ。従つて聖道門の難行に堪え、人間的煩惱を完全に取除き得た純粹持律者持戒者などという聖人とよばれる人間は皆無であり、聖道門の教いに堪え得ると自負することは、思い上りであり、見せかけの偽瞞者であると考えたいように思われます。このように法然上人は人間を赤裸々な姿に於て考えていたものと推察されます。

このように法然上人の教えは一切の衆生を対象とし、人間即凡夫の考えに立ち易行と悪人正機を説くものでありますが、法然上人の弟子達の中には上人の心の眞意を理解出来ず、それぞれ勝手に自分よがりに解釈して、われこそ師法然上人の眞意を伝えるものであると主張して、四派十三流を数える教説が派生したのであります。

例えば、「近來の僧尼を破戒といふべから

ず」「善人なほもて往生す況んや悪人をや」と云つて破戒も無戒も造惡も一称の念仏で許されるという親鸞の説。

「一念を以て往生可能」を説く幸西、行空の一念義。隆寛の多念義、覺瑜の諸行本願義などであります。

一般にこのような破戒造罪も一称の念仏で救われるから差支ないという考えは法然上人の考えの發展であり、淨土教の極致であると考えられているようではありますが、それは全くの曲解であり逸脱であつて法然上人の心に反するものであります。

法然上人は確かに、

「行少なしとても疑ふべからず、一念十念に足りぬべし、罪人なりとても疑ふべからず、罪根ふかきをもきらはずと宣へり」

「罪人なほもて往生す、況んや善人をや」と云つておりますが、多くの弟子達の考えたように無軌道な破戒造罪を無条件に許容するものではなく、そこには嚴然たる限界が存在

するのであります。

法然上人は常に弟子達に対して、

「過去に十惡五逆の罪を犯した者でも称名念仏を修すれば弥陀は必ず救ってくれる」といふ本願を信じ、念仏門に入つた以上は少罪をも犯すまいと心掛けるべきである」

と誠に、又かの「七ヶ条起請」に於て厳しくこれを戒告しているのであります。

ところで聖道門は高智高見、持戒持律を仏道達成の道と説くのですが、人間がそのような境地に達することは絶体に不可能なことであつて理想であり、空想に過ぎないものであると考え法然上人は高智高見者ではなく、また持戒持律者でもない人間の赤裸々な眞実の姿に於て南無阿彌陀仏と称え弥陀の本願によつて往生が達成されると説いておられます。

上人はこのことを、

「聖道門の修行は智慧を極めて生死を離れ、淨土門の諸行は愚痴にかへりて極樂の門に生る」

「一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智の輩に同じふして智者の振舞いをせずして、只一向に念仏すべし」と云つておられます。

又十惡五逆の者が淨土は生れるためには、弥陀の本願への絶体的信頼、往生への熱烈なあこがれ、その為の障害の除去の行業が不可欠の条件となるのですが、聖道門は智力、財力、地位、身分などという外部的力によつて成仏を願うものであり、これに対して法然上人の淨土門に於ては至心信樂欲生我國乃至十念という人々の内奥の精神力を基盤として、煩惱斷滅を企図する意志力を往生の因とされているのであります。

要するに法然上人の説く称名念仏の心は、すでに救われていることへの報恩の感謝の言葉でも、弥陀の來迎を得る為の單なる信号でもなく、人間が至純至情、純粹無垢な境地から仏の覺りに到達しようとする、偽らざる信と行との統一に於ける精神力の發現と考えられるものであります。

私のすきな本

「仏教から基督へ」

——溢るる恩寵の記——



吉田光覚

(福島県桑折町観音寺住職)

今から十数年前のことである。私が某中学の教頭をしていた頃の或日、一冊の図書が寄贈されてきた。

仏教から基督へ——溢るる恩寵の記——亀谷凌雲とある。書名に興味を感じた私は、早速よんでみた。すばらしい。全くすばらしい。私は物の怪につかれたようにむさぼり読んだ。偉大なる感激、今も尚私は、書中の神を弥陀に、キリストを宗祖に置きかえたらと思いつきながら時折読み返しては自己の信をかき立てている。仏教は、浄

土宗は、真の布教は、いや本当の信仰とはここだ、これだと、この書に教わることが多いのである。どの頁を繰っても、言々句々、私の胸を突くのである。

一体何がこれほど私を感動させたのか、著者の人間性のゆえか、赤裸々な信仰の告白、回心する迄の血の通った体験記録が、いとも謙虚にやわらかな筆致で書かれているからであろう。表題に溢るる恩寵の記とあるように著者があの聖書によってあれ程迄、深く強く神の恵みを

受容されたことは宗教人の鏡であると思う。私の如く、職業僧としての立場からムリに信を飲み込もうとしたり説教のための学問をしている者とは雲泥の差だ。

著者の亀谷凌雲師は明治二十一年、北陸は富山の真宗寺院の長男に誕生、父は布教師で留守がち、信仰深い母に少年時代から三部経を教わり、朝夕の看経から葬式法要、月回向等にも父の代理をつとめたという。富山中学、金沢第四高校を経て東大哲学科に入学、宗教を専攻した。同科の主任は姉崎正治博士で、加藤玄智、高楠順次郎、村上專精、前田惠雲等当時そうそうたる学匠の講義を聞いた。而もクラス主任は西田幾太郎博士、それに井上哲次郎、波多野精一、ケーベル等の權威者の指導をうけられたことは幸であつた。

普通の学生なら下宿などでのんびり勉強するところを、非凡な亀谷師は志望して浩浩洞に入り、曉鳥敏、佐々木月樵、多田鼎、加藤智学師等信仰の闊将方と寝食を共にする道を選んだ。次いで明治の親鸞と言われた聖僧近角常親師が青年信仰の育成を目指している求道学舎に無理に入れて貰ひ信仰を練った。

当時学生間では高僧の研究が高まっていた。大川周明の卒論は竜樹菩薩、佐藤直丸は源信僧都、先輩にならっ

て亀谷師は善導大師の研究を選んだ。卒業後、姉崎博士はその論文を出版せよと仰言られたというから立派なものであつたと思う。

大学二年の時、父が急逝、益々実家の生活は苦しくなつた。幸い親族知人の援助で東大を卒業、自立を志して北海道の小樽中学校教官に赴任、暇をみては天理教基督教外、他宗の門をたたいたという。ここで四年間勤務、母校富山中学に転動した。

郷里には大歓声が起つた。生母、妻子の喜びは言わずもがな、暫く住職を欠いていた檀信徒は若き住職を迎えて湧き立つた。早々、延期していた御遠忌の大法会も営むことになった。年に似合わず、朝晩、本堂で勤行する若き住職を眺めて「今頃としては珍らしいよく念仏する御院主様だ」と年寄間で噂し合つたという。

住職と教師を兼職しながら亀谷師がやり出した仕事は仏教道徳の建設と経冊の平易化であつた。氏は真宗の信仰と日常の生活に一つの疑問を抱いた。真宗は往生極楽の道は徹底し、弥陀一仏への帰依は深い。そのため多くの美しい妙好人が多く現われた。それらの伝記はみんなの心を清めて呉れている。然し、それだけでよいのか。もっと徹底した積極的な道徳生活のあらゆる面に立

つての指導があつても考えた。そして憑依の經典や御一代聞書、御文書などから真宗道徳の組織に着手した。

第二は難解な漢文の經典についてである。莊嚴ではあるが、このために全国では毎日延幾百万時間が無意義に費やされている。これを聖書のように日本語で拝読して、いたら皆の受くる恩恵は測り知れないと考えて、阿弥陀經の平易な翻譯を始めた。

この秀才青年の亀谷師がクリスチャンに改宗したのである。師をとりまく人々にとっては正に晴天の霹靂であつた。然し亀谷師自身には長い魂の遍歴の帰着にすぎなかつた。深い思索と尊い信仰体験の帰結であつた。丁度法然上人が叡山を下りられて報恩蔵に籠られ觀經の疏に阿弥陀仏を発見されたときの歡喜にも似ている。かくして亀谷師は弟に寺をゆずり神学校に学び、処もあらうに

帰郷して、嘗てわが寺のあつた町に伝道、教会を建立、全国全米迄行脚され、本書を出版するに至つた。

本書は今日では、凡らく二十版を越えていると思うが、十年前には全国の教会、図書館、小、中、高、大学に洩れなく寄贈され、読む人に偉大な感銘を与えている。現在、出版の波に乗つて仏書にも多くのベストセラーが出てゐる。わが宗にも良書は数あるが、頭での説明だけでなくて、血の滴るような生きた信仰の指導書がぜひ欲しいものである。その為にも私共はわが家から離れて他宗に学ぶことが大事だと思ふ。その意味でぜひ本書の一読を奨めたい。これは単なる他山の石ではなくて、宝石である。この他宗の珠玉をいつの日か、何人かによつて溢るる弥陀の大慈悲に書替えて戴くことを待望して私の好きな本の御紹介を申上げる。

—信仰のよろこびをこの書から—

「新定 法然上人絵伝」



牧 達 雄

(京都東山学園教諭・滋賀県草津市西方寺住職)

人生における真実とはどのようなことをいうのでしょ

うか。いろいろな考え方、感じ方とらえ方があると思ひ

ます。私はこれについて次のように考えます。

少し理屈っぽくなるかも知れませんが、私はありのままの自分を、何のほからいもなく、思う存分にありのままにあらしめる時、真実はあらわれるものと思います。

しかし私どもには自己を飾る心や、自分を弁護しようとする心や、今私がやっているように言葉で説明しようとしたりするいろいろなほからい心が多々ありまして、ありのままの真実の自己を発現することができません。自分自身をいつも歪曲しております。

自己を歪曲することかしこいほからい心の中で最も大なるものは、人間の知恵だと思えます。知に竿させば角がたつといいますが、角がたつのは真実心がなく、不自然であるからで、自然なすがたは最も素直で、こたわりがないはずで、ありのままの真実はどこまでもわだかまりなく、通じ合うものだと思います。

知に対して情のはたらきがあります。古来から知のはたらき、すなわち理性のはたらきによって情の領分を制御することが、人間の人間たるゆえんであると考えられてまいりました。今でも人は善悪の判断さえあればたれでも道徳的でありうると考えているようです。そして理性的であれ、分別をもてと教育します。私ももちろん善

悪の判断分別の大切なことを否定するものではありません。しかし、真実というものはかかる知のはたらきの領域に見出されるものとは思いません。情に竿させば流されるといいますが、むしろこの方に真実が存すると思います。

情のはたらきといいますと、感情、情動、情緒、情操等があります。すべて情の領域にあります。端的には、よろこびや悲しみ、愛や憎しみ、快や不快等の世界であります。理性が、すじ道をたてて分別する冷静なはたきであるのに対し、この領域は動的で、時にはげしくゆれ動き、甚だしく利己的でさえあります。しかもなおかつ私はこの世界に真実を見出そうとするのです。

しかし、情の世界のすべてを是認しようとするものでもありません。この情の領域にひとつの方向が与えられねばならないと思えます。この方向を与えるものが理性だと人はいいますが、私はその方向を与えるものも情の領域に存すると思えます。大切なのはこの情の領域における動的なものがたえず生き生きとすることだと思えます。これを情感といい、情感が涸渇しないで豊かであることが大切で、情感がいきいきとしているところに、詩が生れ、芸術が生れ、宗教が生れ、それが情の世

界に自らなる方向を与えてゆきます。私はいみじくもそのことを一冊の本によって知らされました。今から二十年前のことです。

その一冊の本とは、芹沢銈介先生の画になる「新定法然上人絵伝」なのです。小川竜彦先生がその解説をしておられます。この本は昭和二十九年に理想社から出版されておりますが今は絶版となっております。是非再版してほしい本です。

私は今この本について解説をしようなどとおおそれたことを考えているではありません。私の拙い文章によつてできるものでもありませんし、また言葉や文章によつて絵伝の訴えるものを伝えることは至難であることを知っています。しかし小川先生の解説は絵伝同様に私どもの心底をゆさぶつてやまないものがあります。何故でしょうか、それこそ単なる解説の文字でなく、激しい情感からほとばしり出た文章だからです。小川先生の一字一句が私には経文とも、法然上人の真言とも拝され心打たれるのであります。これこそ真髓と思われるのです。

私はこの一冊の絵伝に出会うまで、法然上人を、柔和円満静かな徳の高いお方とのみ拝しておりました。そして何かそこにもどかしささえ禁じ得ないでございました。

しかしこの本を拝するにおよんで、法然上人のみ心が、生き生きと拝され、したわしく、なつかしくてならなくなりました。人間のありのままの姿を許され、肯定され、包容なされる法然上人のみ心、そのみ心の淵源も知らされました。今ではこの法然上人のみ教でなかったら、私は永遠に救われないのだということを言いきるのに何のためらいもありません。

人生にはさまざまの出来事が相ついでおこつてまいります。嬉しい出来事、悲しい出来事がつぎつぎと交代で私どもに迫つてまいります。しかし何のためらいも、てらいもなく手放して喜び、手放して心の底から嗚咽しうることは、飾る心や、ごさかしいはからい心にさまたげられているものにはなかなかできません。一生の間で何回あるでしょうか。しかし法然上人のみ前では、それが何のてらいもなく大声をあげてよろこび、悲しむことができるのです。はじめて自己の真実を吐露しうるのです。そして自己の情感をいとおしく思うのであります。一瞬一瞬がおしまれてならなくなります。人生が大切に大切になってきます。うれしいことです。

こんな真実の道を知らせて頂いたこの本を、私は一生手放さずに生きてゆきたいと思っています。



＜話しのくず籠＞

情 操

ある日、工事現場をとうりかかった親子が汗まみれになつて、つるはしをふるっている人を見て、

「あのおじさん、大変ね。」

と、女の子がいました。

すると、その子の母親は、

「あのおじさんはね、子供のころ、勉強をなまけたから、こうして、汗をたらして働らかなくてはいけないのよ。だから、しっかり勉強するんですよ。」

と、いいました。

親は、わが子に、他の人々より、少しでも楽なくらしをさせたいと願うものです。しかし、その願いのために、神聖な

労働を侮蔑するというのはいきすぎではないでしょうか。子は親の所有物ではありません。社会全体の宝です。社会のために、人々のお役に立てる。そうした人間に育てなくてはなりません。

私達は、いうまでもなく、親兄弟、隣近所、社会公共の、はかりしれない恩恵をこうむっています。だから、そのおかげさまにこたえるために、それぞれの立場で、精一杯、働らいているのです。

工事現場のおじさんは、たしかに勉強をなまけたかもしれない。しかし、りっぱに社会のお役に立っています。そうした人々が汗水たらしている反面、世の中には、知能がすぐれていながら、その能力を私利私欲のためにのみ使って、他の人々の生活を顧みない一部の人がいます。

工事現場のおじさんの仕事に、御苦労さまと声をかけ、その汗を貴いと思う、すなおな心を育てましょう。

戦後情操教育が忘れられたといわれますが、それはなくなつたのではなく、子供がせっかく持つて生れた心の宝を、親が育てきっていないのではないのでしょうか。

子供は生れながらに、みほとけの心をもっています。その美しい、すなおな心や言葉に耳をかたむける親心が、何よりも大切だと思います。

特集

仏陀の十大弟子

釈尊仏陀が三十五歳のとき、鹿野苑においてはじめての説法〔初転法輪〕をされ、阿若憍陳如（アンニャ・コーンダンニャ——パーリ語名・以下同）以下五人の比丘を最初の弟子とされてから、八十歳で入滅されるまでには多くの弟子をもたれたことはいうまでもない。仏典には、こうした仏陀の多くの弟子達の中から、ことに代表的な比丘比丘尼が今にその名を記し伝えられているわけであるが、一般に「仏陀の十大弟子」と呼ばれる釈尊仏陀に随侍した十人の上足の弟子達がある。すなわちその十大弟子とは、(一)舍利弗（サーリブッタ、智慧第一）、(二)大目犍連（マハー・モッガラーナ、神通第一）、(三)大迦葉（マハー・カッサパ、頭陀行第一）、(四)須菩提（スプーティ、解空第一）、(五)富楼那（ブンナ・マンターニブッタ、説法第一）、(六)迦旃延（カッチャヤナ、論議第一）、(七)阿那律（アヌルッタ、天眼第一）、(八)優波離（ウパーリ、持律第一）、(九)羅睺羅（ラーフラ、密行第一）、(十)阿難（アーナンダ、多聞第一）の十人の高弟を指す。これは、鳩摩羅

什の訳出した『維摩詰所説經』巻上「弟子品」第三に記されるところの伝承であり、とくに中国や日本において、民間に広く尊崇されることに至った最初の記述と考えられる。つまり、ほかの經典には別の弟子達を含めた高足の記述があり、列挙される弟子の人数もさまざまである。しかしおおむね上記の十大弟子が、それらの中でも著名傑出した比丘達であったことには変りはない。そこでこの十大弟子を紹介し、その足跡を通して、仏教の原点を見ることがしたい。

舍利弗（しやりほつ）

パーリ語でサーリブッタ（サンスクリットでシャトリブトラ）という。母親の名ルーパサーリーにちなんで、サーリブ

ツタ（サリリの子）とよばれた。はじめ釈尊と同時代の思想家の一人、懷疑論者サンジャヤのもとで、百名の弟子を従えていたといわれる。しかし、舍利弗は、あるとき、王舎城の町で、托鉢する一人の修行者を見かけ、その美事な行儀とその威風の辺りをはらう姿に魅せられてしまう。その修行者こそは、最初に釈尊とともに仏教サンガをつくり、釈尊の弟子となったアッサジであった。アッサジから、彼の師が誰れであり、その教えがどのようなものであるかを聞くに及んで、舍利弗は、即座に釈尊のもとに走り、弟子となるのである。のちに大乘仏教になって、十大弟子と呼ばれ、定型化される十人の仏教々団の代表的な弟子の中で、舍利弗は智慧第一と呼ばれるが、その才明深智のほどは、数多くの仏弟子も彼に及ぶものがなかったといわれる。現存する經典の中で、最古層に属するといわれる『スッタニパータ』には、セーラ・バラモン「誰れが師の後継者であるか」という問に対して、釈尊は、自ら「わたくしが転じた輪、無上の法輪を、サリリブッタが転ずる。かれは完き人につづいて出現された方です」と答えている。すなわち、釈尊にとって、舍利弗こそが、仏教々団の後継者としての意中の人であったようである。しかし、その舍利弗も、目連とともに、釈尊の入滅に先立って、卒然として入滅したと伝えられている。このことは、

釈尊にとって大きな悲しみでもあったであらうし、仏教々団全体にとって大きなショックであったろう。いずれにしても、舍利弗のようなずば抜けた弟子の存在によって、釈尊の宗教活動は、助けられ、初期の仏教々団は、大きな発展を遂げたのである。舍利弗は、浄土教の經典の中では阿弥陀經の中で、釈尊の対告衆として登場してくるので、名じみ深い仏弟子の一人である。

（大南竜昇）

大目犍連（だいまつけんれん）

普通にはバリー語のマハーモッガラナによって、摩訶目犍連と音写され、大目犍連とか目犍連、そのほか經典には種々の異訳名が記されているが、一般には目連尊者と呼称される。マガダ国の首都王舎城の近くのコーリタ村で波羅門の子として生まれ、隣村に生まれた舍利弗とは年令も同じですでに幼少の頃より親交があったという。はじめ舍利弗と共に世の無常を感じ、六師外道の一人で懷疑論者の散惹耶（サンジャヤ）の弟子となったが、後に舍利弗の導きを受けて釈尊の

弟子となる。もとより、散惹耶の教団にあつても、最初の七日間の修学において教えをことごとく理解し、たちまち二百五十人の弟子をもつに至つたほどであつたから、仏弟子となつてからも一カ月にして阿羅漢果を証悟したといわれる。ともかく目連は舍利弗と共に諸弟子達の指標であり、また實際に相並んで教団の発展と維持に尽力した。つまり目連と舍利弗は、とくに釈尊仏陀の二大弟子とも称される教団の高足であつた。そしてまた両者の仲は、舍利弗が「石のかたまりが雪の山のかたわらに置かれるように私は目連のそばにいる」と讃嘆すれば、目連も「塩の山のかたわらに小さな塩のかたまりがあるように私は舍利弗のそばにいる」とお互いに称讃し合う間柄であつた。しかも經典の記すところによれば、目連は常に舍利弗に一步譲つて、舍利弗の智慧と徳を心から敬慕していたようである。目連は普通「神通第一」、つまり超自然的な能力にもっともすぐれていたとされるが、そのいわれについては定かではない。またここに、尊者目連の名をしてもっともゆかしく思い起されるのは盂蘭盆会の行事の由来である。すなわち、持ち前の神通力で今は亡き母モツガリーの姿をみられたところ、餓鬼道に堕ちて倒懸の苦しみを受けておられたので、釈尊の教えに従つて、お施餓鬼の供養をして、亡き母の苦しみを救われたという。ほかにも目連に関する

逸話が多いが、なかでも釈尊のいところである提婆達多（デーヴァダッタ）が釈尊に反逆を起したとき、舍利弗と共に提婆達多の教団に走つた弟子達を連れもどしたことは有名である。いずれにしても、目連はいつも舍利弗と並び称され、釈尊仏陀の教団の柱であつたわけで、共に釈尊よりも年長であつたから、釈尊自身もひとしお頼りとされていたにちがいない。しかし伝承によれば、目連の死は悲しく、舍利弗の死に會つて悲嘆のぬぐわれる間もなく、王舎城下を行乞中執杖波羅門に襲われて斃れたといわれる。舍利弗の死後二週間ともいわれ、兩人共に釈尊の入滅より先んじたのであつた。

（原 裕）

大迦葉（だいかしょう）

摩訶迦葉ともいい、パーリ語ではマハーカッサパである。頭陀行第一といわれた。マガダ国マハーティッタ村の裕福なバラモンの家に生れ若くして結婚したが、結婚生活もせずして夫婦ともども道を求めたという。出家の契機ははっきりしない

が、一説にはある日畑で、掘りおこされた虫を鳥がついばむのを見て決意をしたという。釈尊が竹林精舎に來られたときに弟子になる。ちょうど釈尊が悟りをひらかれてから三年目にあたるときで、弟子となって三日目には最高のアラカンの位にまで達したという。釈尊が晩年になってマハーカッサパに語った有名な言葉がある。「すでにお前も年老いたのである。無理をせず軽い着物を着て長者からの招待を受けてはどうか、そして私の傍にるようにしては」と。彼は釈尊からのせつかくの心遣いにもきっぱりと辞している。衣食住に無貪著で、粗食に甘んじていた。うすよごれた重い糞掃衣を身にまとい、森の中で頭陀行にはげむことが多かった。清廉潔白な人格者として釈尊の信頼も厚かった。正法を久住させるのはマハーカッサパだけであるともいわれている。しかし彼の教団の地位についてははっきりしていない。むしろサーリブッタとモッガラーナの二大弟子の実力が高くなわけていた。しかし釈尊の入滅後、教団の統率者となるのは誰かということになり、多くの仏弟子たちからその任に推薦されている。釈尊がなくなれると教団の一部は動揺をかくすことが出来なかった。例えば、ある者はこれで自分たちのことをうるさくいう人はいなくなった。自由になったと喜んだという。マハーカッサパは直ちに比丘たちを王舎城に召集して彼

の統率のもとに仏法を永く護持すべく、結集を行った。これが第一回の經典結集である。もともと誰が統率者になるかでアーナンダを推す比丘尼たちとの間に争いがあったともいう。この結集のあとマハーカッサパはアーナンダを仏法の後継者に選び、鷄足山に入り、禪定に入ったまま生涯を終えたという。

(小沢憲珠)

須菩提 (しゅぼだい)

シュボダイともスボダイとも。原名は subhūti、善現とか善吉とか訳されている。釈尊に祇園精舎を寄進したことで有名な給孤獨長者の弟(又は子)で、寄進の折の釈尊の説法を聴聞して出家したと伝えられている。あるいは舍衛国のバラモンの子で、名を負梨 bhūti といふ姿かたちが殊に善い Sui ので須菩提といわれ、大へん悪性のもので親戚から厭われ出家して遊行生活に入る。そして釈尊にまみえ自らの罪を懺悔して得道したと伝えられ、「無諍三昧に住する者の第一人者」と名づけられる。「時に隱遁生活者たちのなかの第一人者」

とか、「供養を受けるべき者たちのなかの第一人者」などともよばれた。このようにこの仏弟子については性格がさだまらないが、さらには「解空第一」とも称せられることに注意しよう。ある夏仏が地上に降りてこられたとき、たまたま耆闍崛山で衣を縫っていた須菩提は、釈尊に敬礼すべく起ちあがろうとしたが、次のように思念してしずかに針仕事を続けるのであった。すなわち、釈尊はこれ眼耳鼻舌身意、住見せんとする者もこれ地水火風、一切諸法にみな悉く空寂にして造作なし、空寂ならばわれ今真の法聚に帰命せんと。このとき釈尊は、空無解脫門はこれ礼仏の義なりと讃歎せられたと伝えられる。これは彼が一切皆空の理をよく解したということのエピソードであるが、この空の思想はいうまでもなく大乘經典の主要テーマの一つであり、『般若經』や『法華經』という初期大乘經典において、重要な対象として須菩提が登場してくる事実を見落すことができない。彼の生れたとき、家中の一切のものが皆空となったので空生といわれ、空行を修するので善業と名づけるなどともいわれる。このように彼についてはさまざまに伝えられ、その性格がさだまらないごくであるが、この中で有名な呼称である解空第一というものは、少しく後代になってからの評判ではないかといわれている。

(平井有慶)

富楼那 (ふるな)

パーリ語名はブンナマンターニブッタといい、普通には富楼那弥多羅尼子などと音訳され、ほかに意訳されて満慈子などとも称される。バラモンの出身であったとされ、釈尊の故郷であるカピラヴァットゥにほど遠からぬドーナヴァットゥ村に生まれた。母マンターニーは、釈尊の最初の弟子である五比丘の一人の、阿若憍陳如長老の妹の子であったなどと經典に付記されており、一説によればこの叔父の教導によって出家したともいわれる。ともかく釈尊の出現を知ってベナレスにおいてその弟子となったという。また別の所伝によれば、富楼那尊者はある嫉妬心から出家を志し、二十年間余の修行研鑽を経て外道諸派の教義を理解し、王舎城において釈尊と論議をかわすことになった。このとき釈尊に破折されたのが機縁となり弟子となったとも伝えられる。いずれにせよ弁才に恵まれ、一般には「説法第一」と称讃され、釈尊の弟子の中で最も雄弁家であった。この説法は大変理解しやす

く、また音楽的な響きをもつて多くの人々を教化し魅了したのである。とくに、故郷の人々には殊更に信望あつく広く慕われていたという。有名な逸話としては、舎衛城の郊外にあったとされる園林に安居していた富楼那を、その声望を聞いた舍利弗が尋ね、仏法に関して問答したというものがある。そしてお互いのすぐれた弁舌を確認しえてその徳風を大いに讃歎し合ったという。このように經典には富楼那尊者を指して、「説法人中最第一」などとししばしば説かれるわけであるが、実際のところ、その由来を示す逸話としては、ほかに余り見当たらない。

(原 裕)

迦旃延 (かせんねん)

パーリ語でカツチャヤーナ。大迦旃延、摩訶迦旃延という呼び名の方が、われわれには親しみがある。西インドのウツジェーニーの宰相チャンダツパツジョータの子で、父の死後には大臣となった。王の命を受けて、釈尊をその国に招くために、七人の従者ととも、釈尊を訪れるのであるが、その

教えを聞いて感動し、そのまま出家し、阿羅漢果をえたといわれる。のちに、王の命令を思い起して、師の来遊を乞うた時、釈尊は、あなたこそが、王に仏法を伝えるために適任であるとして、帰国することを指示している。帰国した迦旃延が、国王のために語った詩偈が、『テラガータ』という古層の經典にのこされている。「鋭い矢は抜き難く、凡人は〔他人からうける〕尊教を捨てることは難しい(四九五)」や「人は、他人に悪事をなさしめてはならない。……なぜならば、人々は業に縛られる者だからである(四九六)」という詩には為政者としての心がまえを国王に進言したものであるかのようにも受けとられるし、「智慧のある者は、財産が消失しても、なお生きる。智慧をもっていないならば、財産があっても、生きられない(四九九)」(『テラガータ』は、筑摩書房の「仏典」による)という言葉は、世俗人の生き方への仏教の最も基本的な考えをのべたものであろう。迦旃延の教化によって、ウツジェーニーの人々の多くが、仏法に帰依したと經典は伝えている。

彼は、論議第一の人といわれている。論議とは、釈尊が、教えの要点を簡潔に説かれた場合、比丘たちの請いによって、それにコメントを加え、解説してあげることであるが、この才能において、彼は、際立った持ち味を発揮したらし

い。迦旃延に従う一群の比丘たちがあつて、「かれらは、みな善く諸経を分別して、法相を説く」と経典は伝えている。彼が、仏滅後にも生存して、釈尊の大きな願いでもあった四姓平等の実現に努力していたことや、西インド一帯の地方に活発な教化活動を行つて、仏教々団の発展につくしたことは、経典の中に偲ばれるのである。

(大南竜昇)

阿 那 律 (あなりつ)

パーリ語ではアヌルッダと称されるので、阿泥婁駄などと音写されるが、一般には阿那律とか阿難律と記される。釈尊の父浄飯王(スッドーダナ)の後継をして釈迦族の王となつた摩訶那摩(マハーナーマ)の弟であるから、釈尊とはいふこの関係であつたわけである。成道された釈尊が故郷に帰つてはじめて説法されたとき、阿難(アーナンダ)などの釈迦族のものと共に出家したのである。「天眼第一」といわれるが、天眼とは五眼の一つで、三界中色界の天人がもつ眼で、その眼力は衆生の生死を知る特別な能力があるとされる。阿

那律はあるとき、釈尊の説法を聞いている最中にうっかり居眠りをしてしまい、釈尊の呵責を受けた。そのために以後不眠の誓いを立てて修行に励んだが、やがて眼病にかかつてしまった。この折釈尊は、過ぎたるも及ばざるも共に不可であることを論じたと伝えられ、さらに療治もすすめたが、阿那律の意は固く、ついに肉眼は失壞し失明してしまつたが、これによつて天眼を得ることになつたという。しかもこの阿那律が失明した際には、釈尊仏陀及び舍利弗をはじめ多くの弟子達が、阿那律の衣食の世話をしたという心暖まる情景が経典の諸所に記載されている。たとえば、「迦葉最前にあり、舍利弗中央にあり、阿難最後にあり、目連補佐となり、世尊針の孔を通し、衣を縫う。ジャリーニの知らせにより人々食を運ぶ」などと説かれていたのである。ともかくも、阿那律は自己のことを告白して、それを説法としたとされる。その後は教団の長老として穏やかな活動をなし、集会にあっては常に釈尊の近くに座していたと伝えられる。そして、釈尊がクシナラーにおいて入滅されたときも、阿那律はおそばに待しており、悲嘆にくれ慟哭する弟子達に對して、靜かに訓戒し、その動揺をしずめ叱咤激励したという。舍利弗と目連とを間近に失い、今また世尊釈尊仏陀の入滅に遭遇した教団にとって、眼の見えぬ阿那律は実に大きな存在であつたわけ

ある。その死については、釈尊入滅の後、五、六年を隔てて、毗舍離（ヴェーサーリ、梵名ヴァイシャリー）に近いヴァツジ国のヴェールヴァ村に、その竹林のかたわらでひそかに入寂したといわれる。

（原 裕）

優波離（うぱり）

原名 Upali。近取、近執などと訳される。持律第一と称せられる人である。彼はスードラ階級の出身で、釈尊の生地・カピラヴァットウの理髪店に生れ、釈迦一家に仕えていたという。釈尊成道後六年目に阿那律や阿難たちが出家したとき、これにしたがって出家したが賤種出ということで心はれぬものがあつた。これを察した釈尊は、出家以前は地位の高下・種姓の不同も、出家後は何人もその差別観を持つべからざる旨の法を説き、教団内の席次は受持の前後によることを示したという。これ後に四姓平等主義の嚆矢とされる物語である。釈尊は後に彼が阿羅漢位に入りその器量あるをみて、戒律をことごとく伝え、第一結集においては、阿難が経

を、彼が律を誦出したことは有名である。かくて彼はいわば「戒律の番人」となるわけだが、ここにいくつかのエピソードが伝えられている。一つはアッジュカというヴェーサーリ出身の僧の事件である。この僧はある信者の財産争いにまきこまれて、一方に加担したとして怨みを受けて訴えられるはめとなった。これをアッジュカの行状に誤りなしと裁断したというのである。またある事件とは、かつての妻と交わりをした夢をみた僧のエピソードである。これを後悔したこの僧は故郷に帰ろうとして、優波離から「夢中の行為は不犯なり」と断定されたというのである。またこんな話もある。結婚をした富豪の娘が、夫の許可のもとに出家したが時すでに妊娠しており、これを他の比丘尼から非難される。これを優波離は、彼女が幼少の時代より出家を望んだ求道の者であり、問題の妊娠も出家以前のことでしかも本人は妊娠したことに気付かなかつた事実を満場の中で証明して、彼女に罪なしと判断したという。このように律に関して釈尊からも絶大の信頼を受けていた優波離は、教団内の一味和合にことのほか心を配り、後には律藏伝持の第一祖たる評判も受けるようになった。

（平井有慶）

羅 睺 羅 (らごら)

バーリ語でラーフラという。釈尊のただ一人の実子。釈尊は、太子出生の報に接した時、「障碍（しんごう）が生じた。繫縛が生じてしまった！」と慨嘆されたという。たしかに、修行者というものが、自由な境地を獲得しようと努力するものであってみれば、釈尊にとって子供というものが、愛著を生ずる原因の最たるものであり、釈尊のこの言葉は、正直な、ありのままの嘆息であつたと受けとられる。しかし、釈尊にとって、羅睺羅の誕生は、かえって好都合でもあつたようである。それは、インドでは、家系を絶やさることが、家長にとって、第一の義務であつたからである。したがって相続者の出生は、出家の決意をより堅いものにしたであらう。釈尊自身の出家に、このような複雑な事情があつたと同じように、羅睺羅の出家もまた釈尊の説得に負うことが大きかった。成道後、初めて故郷のカピラ城に帰った釈尊は、年老いた父王、妻のヤシドーダラ、そして愛児と再会するが、この劇的場面は想像に

余りある。しかし、この時、釈尊は、舍利弗を和尚に、目連を阿闍梨として、羅睺羅を出家させている。こうして沙弥の第一号が誕生したのである。真実なる法を求め、それをとともに目ざしてゆく仏教サンガに、最愛の子供を参加させることが、父親にとって、どんなに仕合せなことであつたことか。出家した羅睺羅は、極めて温厚で、釈尊の教えに忠実な修行者であつたらしい。十大弟子の一人としての彼は、教団の規則を綿密に守り、その教えを誦読することを懈ることがなく、密行第一の人と呼ばれていた。サンガの規則の一つに、具足戒を受けていないものは、比丘と同宿してはいけないというきまりがある。羅睺羅は、この規則を守るために、ただちに房を出て、釈尊の便所に臥したという。この時、羅睺羅の心の底に、自分が、釈尊の子供であるということ。しかも、教団の有数な指導者である舍利弗や目連を師として出家したのだという誇りがよぎらなかつたであらうか。律藏は、彼が慢心を起すことなく、素直に立ち去つたと伝えている。この記録こそは羅睺羅の人柄を偲おもはせるのに最もふさわしいエピソードである。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇
(大南竜昇)

阿 難 (あなん)

お経を読むと「仏阿難に告げたまわく」という言葉に出くわすことが多く、十大弟子の中では最もなじみのある名前である。パーリ語ではアーナンダといい、釈尊のいとこにあたり、釈尊に叛逆したデーヴァダッタの兄弟といわれる。釈尊が悟りを開かれてから初めて、生れ故郷のカピラバツへ帰郷したときに出家をしている。間もなくして釈尊の常侍の侍者となり、釈尊が入滅するまでの二十五年間つねにつきそい、身のまわりの世話をしたという。また記憶力にすぐれており、釈尊が説法した内容を正確に記憶していた。このため多聞第一とか総持第一と称される。釈尊がなくなられた直後、仏弟子たちは第一回の經典編纂の結集を行うが、そのとき実力の第一人者マハーカッサパの命を受けて、釈尊が生前に説かれた教えの一端を大衆の前で誦出したという。經・律・論の三蔵の中で、經のはじまりになる。だが阿難は釈尊の在世中つねにつきそい教えを聞きながらも、悟りを開くことができなかった。編纂結集のときにはマハーカッサパの教誡によって修行

大悟してから、はじめてその席に加わることが許されている。マハーカッサパのなき後は、教団を統率して仏法の護持につとめている。阿難の功勞の一つに、比丘尼教団成立のきっかけをつくったことがある。釈尊の養母マハーバジヤパティーらが出家を願ったとき、釈尊は女人の出家を許さなかったが、阿難が仲介となって出家が許された。その後長く比丘尼たちの支持尊敬を受けている。阿難の人情深く極めて人間的な面を伝える記事は多い。例えばすでに老令の釈尊が水浴をおえたとき、阿難はその背をなでて肉体の老衰化を非常に悲しんだという。また同僚の比丘や在家の信者たちにも人氣があったことも伝えられる。阿難と女性との関係のエピソードも有名である。彼は端正な顔だちをしていたという。魔法使いの娘が阿難に熱烈な恋をして彼を監禁してしまったことなど、またある比丘尼が恋の病におちいってしまったことなどの話がある。しかし極めて誠実でもあった。釈尊の侍者としてのつとめもこまごまとした所によく気が配られ、修行の機会がなかったともいう。阿難は非常に長寿であったといわれ一説には百二十才まで生きたとも伝えられる。彼の死については、ローヒニ河の真中で焚死し、舍利はシャカ族とコーリヤ族に半分づつ分けられたとも、マガダ国とヴェーサーリー国に分けられたともいわれる。

(小沢憲珠)



法然上人霊場めぐり Ⅱ第九回Ⅱ

村上博了

第十五番札所

京都伏見

源空寺

第十五番札所は京都市伏見区瀬戸物町にある源空寺である。

寺は往昔むかし不便な田舎、木幡の里（現在の宇治市上炭山）にあった。三井寺の碩徳公胤僧正の弟子忍空の草庵であるが、忍空は法然上人の教化を信奉して、よくお念仏を唱えていたのである。

建久六年（一一九五）三月、法然上人六十三歳春彼岸会に先

立つ奈良東大寺大仏殿落慶供養法会大導師を勤めての帰途、忍空等に招ぜられ同草庵に止宿、同地の人々を教化せられた。上人は諸人の要望に応え、写経文や文書等の用紙を張り合せて自像を造り忍空に授けられたのである、俗に張子又は張貫御影と云われた。忍空は上人御影を本尊とし、草庵を法然院源空寺と称し専修念仏修行道場としたのである。

慶長十七年幡随意上人が台命をうけ九州各地に巡教の帰途、源空寺に立寄り、幕府の許可をうけて現在地に迂した、嘉永元年四月炎上したが、御影は無事であったのである。御詠歌は

一声も なむあみだぶと 云う人の

蓮はすの上に のぼらぬはなし

と云う。お念仏の功德宏大無辺、唱うれば必ず往生が出来ることを示す霊場である。

（国鉄線・桃山駅、近鉄京都線・桃山御陵前駅下車）



奈良大仏殿の落慶に導師を

つとめた帰路上人が滞在の処

〈知恩院所蔵〉

第十六番札所

京都洛西粟生野

光明寺

一

同寺は洛西粟生野、現在の京都府長岡京市粟生にあり、西山浄土宗総本山、念仏三昧院報国山光明寺である。

二

上人四十三歳承安五年三月、四明黒谷報恩蔵に於て、一向専念の文を拝し如来の本旨を悟り専修念仏の浄土宗を開宗、山を降りて、この西山下の広谷に仮住された。かつて上人二四歳保元元年に、洛西嵯峨清涼寺印度渡来の釈迦如来宝前に七日間参籠求法、ついで南都の碩学蔵俊師往訪の旅に当り、この地茂右衛門宅に一泊されたその因縁により居住すると寺伝は伝える。洛西当地方は上人母秦氏の勢力圏にあり又桂川

により阪神地への利便もある要害の土地であったことも上人の足が自然に此地に向いた有力な一因であったろう。

建久九年三月、上人門下の熊谷蓮生房は、その聖因を喜び、この地に草庵を結び念仏三昧に毎日を送った。上人はその草庵を念仏三昧院と名付けられたのである。

光明寺という寺号は、四条天皇が上人の余徳を慕って下された名称である。

報国山と云う山号は、仏教四恩に由来する。蓮生房が粟生野に閑居された正月、上人は別時念仏中三昧発得されたが、三日は、上人兼実公の依託に答え選択本願念仏集を完成した、浄土宗にとっては意義深い年である。

源平争乱も一時静謐、粟生野には、念仏三昧院の念仏の声四方にひびき、きく人、申す人共に、心身和平になり、各自正業に打ち込み、人を犯さず又犯されず万民安居、社会福祉を請来する。父母の恩、社会の恩、国土の恩、三宝の恩が自然に生起することとなり、各家庭では笑声が充ちみち、まさに報国の源なりと云うことが出来るので報国山ともなる。

上人示寂三百五十一年目の永禄六年三月十日、正親町天皇は、上人が浄土門の根元であることを敬感「浄土門根元之地」と宸筆し、時の住職廿五世顯空師に賜った。浄土門とあるは甚深の意味がある。上人は実に選択念仏の元祖であり、

浄土門の祖である。光明寺は「浄土門」を有難くうけとめ、石に刻して現総門前に高々と立て、上人の遺徳を偲んでいる。

三

安貞元年（一二二七）六月二十一日上人歿後十五年山徒検議、大谷の法然上人御廟の破却を議決、勅許をうけた。翌二十日となる。朝からむし暑い猛暑であった（山門所司専当以下）山法師三千余人が、もみにもみ汗いきを立てて叡山を下りた。さあ大変である。当時の主権者後白河法皇さまも、双六のさい、鴨川の洪水、山法師は「ままならぬ」と嘆ぜられたその山法師が武器をかざして山をおりたのである。

京都守護職修理亮北条時氏は内藤五郎兵衛と藤原盛政入道西仏にとり鎮め方を命じた。元氣一杯の西仏は、法体を馬上に子息一人を伴とし急ぎ馳せ向い、大音声を張り上げ、

やあやあ、法師共うけたまわれ、假令公許があったとても、事の仔細を武家方に申入れず、勝手気ままにかような振舞うとは、狼藉なり無礼なり、しずまれしずまれよと、しきりにさとしなだめたが馬耳とう風であった。西仏は

一段と大音を挙げ

医王山王もきこしめせ、念仏守護の赤山大明神にかわりたてまつりて、魔縁うちはい侍らん。いつわりて、四明三



法然上人の御遺骸を茶毘した処ところ

〈知恩院所蔵〉

千の使と号し、みだりに四魔三障のむらがり来るか、……
覚悟せよや

とばかり命を捨てて馳せまわる。面をむける者もなく蛛の子
を散らすよう皆逃げ去った。

この時、宇都宮蓮生は急を耳にし五六百騎を狩り集め、上
人廟堂を守護し辛じてことなきを得たのである。

四

かような紛争は、一挙に静まるものではない。上人門第一
同は御墓を他に迂す以外に方途がないと結論、その夜中に石
棺を掘越し、上人片見の品々とを副い、洛西太秦の米迎房円
空（現在西光寺）の室に隠した。太秦は上人母秦氏俗縁の地
である。なにかと便宜があったらしい。

翌二年正月二十日、上人の石棺から数行の光明が出た。円
空は大いにあやしんで、その光明先を尋ね調べた所、太秦の
午未の方粟生野まで行っていることが判った。朝になって同
地の同行幸阿（蓮生のゆづりをうけていた）を訪い、ことの
次第を物語ったのである。幸阿も靈夢を感じ得する所があった
ので、協議の上で、

今年は、上人十七回忌辰に当るから来る廿五日に茶毘式を
修行したい

と、有縁一同に触れた。

廿五日未明、太秦西光寺（近くに広隆寺あり）から、上人石棺を粟生野に迂し、現光明寺大方丈唐門前紫雲松の所で荼毘することとなったのである。

それに先立ち、ひそかにお別れするために石棺の蓋をあげた。勅修御伝には

面像いけるがごとくして 異香芬馥せりと伝える。山城名勝志も

上人ノ面貌 アタカモ存日ノ如シ云云

とする。生前と同ようであった。酒飲みならばすぐ朽ちはてるが、そうでなかった所に、上人が平素如法の御生活であったことを立証する。尊くも有難いことではないか、本堂に向って右側に安置されている。

五

御詠歌は

つゆの身は ここかしこにて 消えぬとも

心は同じ はなのうてなぞ

と云う。上人の御歌である。ご遺体を荼毘した時、五色の紫雲が棚引き異香薫じ、念仏の声する所、皆遺跡なりとの御言葉と俱会一所の教とを合せ思う時、お歌の意味が生き生きと

してくるものがある。西山広谷の土地は、なにも云わない。又紫雲の松も語らない。

しかしお念仏は、人から人に伝えられて消え去ることがない。念仏の声する所皆遺跡せとする上人の至言は、心は同じ花のうてぞとする、信仰の有難さ、甚深法味つぎるところがない。御影堂には、上人七十五歳遷座時、船中でお作りになつた張子の御影を本尊とする、光明寺は浄土門根元地とする霊場である。

（阪急線・長岡天神駅下車、国鉄東海道線・神定（こうた）り）駅下車）。

教育えほん

新刊 ほうねんさま

画 長田芳一・文 五雨みな子

B5（L判）表紙共六丁

価 二〇〇円（送料実費）

京都市東山区林下町

発行所

浄土宗宗務庁

電話（〇七五）五四一―七二三一（代）

求道青年像奉安のすすめ



若き日の法然求道誓願像

原像所在地

京都嵯峨清涼寺

大なる哉法然上人

大野 法道

(大本山増上寺法主)

わが日本が産んだ多くの宗教家の中で、一頭地を掘んでいるのは法然上人である。上人は平安時代の終り、源平の合戦の八釜しかつた時に生れ、幼時に父を失い、十五歳の時に比叡山に登って天台の学問を修められました。当時のわが国は貴族の仏教とでも言いましょうか、皇室を始めとし、公卿等の間に仏教

は広まっていたが、主として仏に供養をささげることには利益があるとされていた。之に對し上人の心を動かししたのは、仏の心は世間の万人に広く輝いているものである。それを拜むのは、仏の心をわが身に受けるにあると信じ、万人が仏の名を称えることにある。

- 法然上人24歳求道青年像
Aタイプ高さ24cm・重量1kg
(特殊合金製) 限定品
1体 12,000円
- Bタイプ高さ37cm・重量6kg
(ブロンズ製) 限定品
1体 88,000円
- 企画発行
求道青年法然房源空
顕彰会
- 謹製
三井金属工業株式会社
- お申込み先
求道青年法然房源空
顕彰会
京都市右京区嵯峨野宮ノ
元町76 阿弥陀寺内
TEL(075)881-2316
振替京都28797
浄土宗宗務庁
京都市東山区林下町400
総本山知恩院内
TEL(075)541-7131

つまり念仏するにあり、それによって仏の国である浄土へ生れることができるという信仰を打立てられました。そこに特殊の供養を去って万人共通の道が開かれたのであります。ただしこうした信仰の立つまでには、青年時代に叡山から出て京都の嵯峨の釈迦堂へ一週間おこもりし、求道の心をこめて祈られてから奈良方面へ旅行して求道されましたが、何人も上人を指導する者が居ませんでした。依て再び叡山に戻って求道の誠をつくし、遂に四十三歳の時に念仏の道を開かれました。世間浄化の力として、上人の求道時代の初頭に掲げる上人の像を弘布せんとする顕彰会の企画の大なることを感じます。



仏説無量寿經 卷下(二)

村瀬 秀雄

一 わが善き親友

寿命甚難レ得 仏世亦難レ値 人有二信慧一
難。若聞精進求 聞レ法純不レ忘 見敬得

大慶。則我善親友。是故當レ発レ意 設満二

世界一火 必過要聞レ法、會當下成二仏道一

広済中生死流上。

寿命ははなはだ得がたく、仏世もまたあいがたし。人の信慧のあることは難し。もし聞かば精進して求めよ。法を聞いて

てよく忘れず。見ては敬い、得ては大いによろこぶべし。すなわちわが善き親友なり。この故にまさにこころをおこすべし。たとい世界に満てらん火をも、必ず過ぎてかならず法を聞け。かならずまさに仏道を成じ、広く生死の流れをすくうべし。

(意訳)

この世に生れて人身を受けることは甚だ得がたいことである。また人間に生れても仏の出世にあうことは更に困難である。従つて人として信心と智慧とを得ることはいよいよ難しいことである。幸いにして無量寿仏の救いの教えを聞いたならば、精進努力して極楽浄土への往生を求めなくてはならぬ。仏法を聞いたならば忘れることなく、仏にあえは仏を敬い、仏の法を得たことを心から喜ぶべきである。このような

人こそ釈尊にとつて善い親友であるといふべき人である。こうしたわけであるから、誰でも極樂淨土に往生し、そこで悟りを得たいと願う心を起さなくてはならぬ。たとい世界が大火で覆われることがあつても、必ずその火を潜り抜けて法を求めなくてはならない。そしてまさしく極樂淨土に往生し、仏となつて広く人々を生死の世界から救わなくてはならない。

二 最尊の觀音勢至

阿難、彼仏國中諸聞衆身光一尋、菩薩光

明照二百由旬。有三菩薩一最尊第一、

威神光明普照三千大千世界。阿難白

レ仏、彼二菩薩其号云何。仏言、一名二觀世

音二名二大勢至。是二菩薩於此国土

一修二菩薩行一命終轉化生二彼仏國。

「阿難よ、かの仏國の中のもろもろの声聞衆の身光は一尋なり。菩薩の光明は百由旬を照らす。二菩薩ありて最尊第一

なり。威神の光明はあまねく三千大千世界を照らす」阿難は仏にまうさく。「かの二菩薩のそのなはいかんぞ」仏はのたまわく。「一をば觀世音と名づけ、二をば大勢至と名づく。この二菩薩はこの国土において菩薩行を修し、命終轉化してかの仏國に生ず」

(意訳)

釈尊は説かれた。「阿難よ、極樂淨土で小乗の修行をつんでいる声聞たちが放つ光明は身の周りにしか照らさない。大乘の修行をつんでいる菩薩たちが放つ光明は一万六千軒にも及ぶ広範囲にわたつて照らす。その中でも最尊第一といわれる二菩薩があつて、そのけだかい光明はあまねく全宇宙を照らしている」阿難は釈尊に問い奉つた。「その二菩薩のお名はなんといわれるのでしょうか」釈尊は答えられた。「片方の菩薩は觀世音といい、他方の菩薩は大勢至という。この二菩薩はこの世で菩薩行を修行し、よは菩提を求め下は人々を教化し、四弘誓願をおこし六度の行を修行し続けていた。そして命終の後に身を替えて極樂淨土に往生したのである」

三 聞法の喜び

無量寿仏為三諸声聞菩薩大衆一莊三宣

法一時、都悉集二会七宝講堂一。広宣二
道教一演二暢妙法一、莫レ不二歡喜心解
得道一。即時四方自然風起普吹二宝樹一

出二五音声一、雨二無量妙華二隨レ風周遍。

自然供養如レ是不レ絶。一切諸天皆齊二

天上百千華香万種伎楽一供二養其仏及

諸菩薩声聞大衆一、普散二華香一奏二諸

音楽一前後来往更相開避。当二斯之時一

熙怡快樂不レ可レ勝レ言。

無量寿仏のもろもろの声聞、菩薩、大衆のために法を宣
したもう時は、すべてことごとく七宝の講堂に集合す。広く
道教をのべ妙法を演暢したもうに、歡喜し心解し得道せずと
いうことなし。即ち時に四方より自然に風が起り、あまねく
宝樹を吹いて五音の声をいだし、無量の妙華を雨ふらし、
風にしたがって周遍す。自然の供養はかくの如くにして絶え
ず。一切の諸天はみな天上の百千の華香と万種の伎楽をもつ
て、その仏およびもろもろの菩薩、声聞、大衆を供養す。あ

まねく華香を散じ、もろもろの音楽を奏し、前後に来往し、
更にあい開避す。この時にあたって熙怡快樂はいうにたえる
べからず。

(意訳)

無量寿仏が極楽浄土の声聞や菩薩やその他大勢のために法
をお説きになる時は、これらすべての人々は七宝の講堂に集
まる。やがて無量寿仏が広く教法をお述べになり、妙なる法
を演説されると、聞いている人々はみな歡喜して心から了解
し、仏の道を悟らない者は一人もいなかった。またその時には
四方から自然に風が起って七宝の樹々の間を吹き抜けてゆ
く。すると風の音はゆたかな音調の音楽を奏し、空からは数
限りなく妙なる蓮華が降って、風にしたがって舞い落ちる。

このような自然の供養は絶え間なく続けられてゆく。またす
べての天人たちは天上の多くの華を散らし、香を薫じ、各種
の音楽を奏して無量寿仏を初め多くの菩薩や声聞やその他の
人々を供養する。そして天人たちは華や香を散じたり音楽を
奏しながら、前後左右に行きちがい、更に入り混って供養を
続ける。このように開法の人々は心がやわらいで悦びに似た
り、その楽しさはどうい言葉をもつていい現わすことがで
きない。

四 菩薩は和同敬愛する

摧二滅嫉心一不レ忌レ勝故専樂二求法一心
無二厭足一。常欲二広説一志無二疲倦一、
擊二法鼓一建二法幢一旺二慧日一除二癡闇一
修二六和敬一、常行二法施一志勇精進心
不二退弱一。為二世燈明一最勝福田。常
為二導師一等無二憎愛一。唯樂二正道一無二
余欣哉。拔二諸欲刺一以安二群生一。功慧
殊勝莫レ不二尊敬一。

嫉心をさい滅して勝れたるをにくまざるが故に、専ら法を
樂求して心に厭足なし。常に広説を欲して志に疲倦なし。法
鼓をうち、法幢をたて、慧日をかがやかし、癡闇を除き、六
和敬を修す。常に法施を行じ、志勇精進にして心は退弱せ
ず。世の灯明となつて最勝の福田たり。常に導師となり等し
く憎愛なし。ただ正道をねがって余の欣しやくなし。もろも
ろの欲刺を抜いて以て群生を安んず。功慧は殊勝にして尊敬

せられずということなし。

(意訳)

極樂淨土の菩薩たちは人を妬む心を滅していたから勝れた
者とみても憎まなかつたから、従つて悟りの道を求めること
に専心し、少しも厭い倦むことがなかつた。常に広く説法を
するのに疲れる事がなかつた。法の鼓を打ち鳴らし、法のは
たらきをたて、智慧の光りを輝かし、愚痴の闇を取り除き、
相互に和同敬愛することに努めた。大法を施し精進を続け、
怠惰の心を起さなかつた。世の燈明となつて闇を照し、自ら
最勝の福田となつて利益を与えた。常に世の導師となつて人
々に平等に接し、憎愛の区別をしなかつた。ひたすら仏の教
法を求め、世間の喜びに心を散らすことがなかつた。人々か
ら欲望の害を抜きとつて心を安んじさせた。このように菩薩
は勝れた功徳と智慧とをもつていたので、世のすべての人々
から尊敬されていたのである。

五 なぜ念仏しないか

無量寿国声聞菩薩功德智慧不レ可二称
説一。又其国土微妙安樂清淨若レ此。何
不二力為レ善。念レ道之自然。著於無二上

下一洞達無二邊際一。宜二各勤精進努力自

求^レ之、必得^三超絶去往^二生安養國^一、横

截^二五惡趣一惡趣自然閉、昇^レ道無二窮

極一。易^レ往而無^レ人、其國不^二逆違一自

然之所^レ牽。何不下棄^二世事一勤行求^中道

徳上。可下獲^二極長生一壽樂無上^レ有^レ極。

無量寿國の声聞菩薩の功德智慧は称説すべからず。又その国土の微妙安樂にして清浄なることはかくの如し。何んぞつとめて善をなさざる。道を念すれば自然なり。あらわにして上下なく洞達して辺際なし。よろしく各々は勤精進し、努力し自らこれを求むべし。必ず超絶し去つて安養國に往生することを得れば横に五惡趣をきり、惡趣は自然に閉じて道に昇ることに窮極なし。往き易くして、しかも人はなし。その國は逆違せずして自然のむく所なり。何んぞ世事をすてて勤行し、道徳を求めざる。極長生をえて寿樂は極りあることなかるべし。

(意訳)

極樂浄土にいる声聞や菩薩が持っている功德や智慧につい

ては、とうてい言葉で説明できない程に勝れているものである。更にまた極樂浄土がいかに微妙であり、安樂であり、清浄な世界であるかについては前に説いた通りである。それなのに人々は、どうして念仏を唱えて往生を願うことをしないのであろうか。念仏往生の道を信じ、念仏を唱えれば自然に往生できるのである。念仏を唱えて往生できることについては、身分や境遇の上下尊卑によって区別されないことで、いずれも同じく目的を達し、限らない功德と智慧が得られる。各人はよろしくつとめて精進し、努力して自ら極樂浄土に往生できる道を求めなくてはならぬ。念仏を唱え、順序をふまずに直ちに極樂浄土に往生すれば、それは即ち地獄等の五惡道を同時に断ち切ることであり、惡道に通ずる道が自然に閉ざされ、悟りを求める道に向つて際限なく進むことになるのである。極樂浄土に往生する道は、このように易行道であるにもかかわらず、往生を願う人はまことに少ない。極樂浄土は逆つたり違えたりせず誰でも迎えるところであつて、自然法爾の理によつて往生できる所である。それなのにどうして人々は、日常生活の業務に追われてばかりいて念仏を唱えないのか、念仏往生の道を求めようとししないのか。この世の寿命は短かくとも、極樂浄土においては極めて長い生命が得られ、永遠に生きる無限の楽しみが得られるのである。



念佛ひじり三国志

(六)

―法然をめぐる人々―

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

そんでいる。

女人は、過日出遇った盲目の琵琶師生仏の話聞いて、はるばる遊蓮房円照を訪ねてきたらしい。

「この西山にこもって修法がしたい」という。

これも無体な希望であった。

比叡や高野のように「女人禁制」が法制化されていないとは言え、この山奥や谷々で庵(いおり)を結んでいる私僧(ひじり)たちが黙っているはずがない。彼らの感覚には、未だきびしい女人拒絶の慣習があった。



その日突然、ひとりの女人が西山広谷に遊蓮房円照を訪ねてきた。二十四、五歳の肌白い美女であった。やんごとない身分の女性であることが、態度物腰、言葉づかいで、すぐにわかる。

女人のひとり旅は危険きわまる。まして奥深いこんな西山へ登ってくることは無暴な行動だった。山路には鬼や賊がひ

汚がれの多い女人は修法のさまたげとなるのである。

「あなたはどこの女御か。何を考えてこんなところまでやってきたのか」

無法な決意をなじる前に、遊蓮房円照はひととおりの事情を聞くことにした。

藤原忠雅の娘で、後白河法皇の愛妾である身分を、女人はほのめかした。

「花山院殿の娘御であつたか」

円照は今更ながらにおどろいた。花山院忠雅は前の太政大臣であつたからである。

しかし貴子という名の女人が語った話は、いっそう奇怪であつた。

彼女の邸、花山院には昔からひとりの阿闍梨が出入りしていた。太政大臣とは縁戚筋で、貴子が初めて会ったとき、すでに八十歳を越える高齢であつた。

この阿闍梨が花山院邸へくる目的は、仏法を語るというよりもそこにある史料を披見することにあつた。畢生の業として、彼はこの国の歴史を編もうとしている。「扶桑略記」とみずから名づけていた。

すでに阿闍梨は三十五、六歳ごろ、いちおう完成させていたが、なお完璧を期するために花山院邸へ通ってくるのであ

前号のあらすじ

円照は一夜にして法然の人格に魅せられてしまった。時は承安元年（一一七一）の春、胸の感動を抱きしめながら、京へ下つた円照は、朝市の街角で、琵琶法師の歌に耳をすます。「承安なんぞと、年号あらた……弥勒の年と、称すべし」と響く今様の詞はただ事ではない。この盲目の若い法師に興味をもつた円照はふと声をかけるのだった。実に、この若者は、父信西の忠臣であつた左衛門尉師光、いや今の西光法師のもとにあり、亡き父の妻紀伊ノ二位の寵愛を受けているという。しかも、この琵琶法師資時は、懐しい西洞院姉小路の父信西の邸跡に、西光法師と共に住んでいた。久しぶりに会う西光法師との語らいに、円照は、入道相国平清盛への西光の激しい批判を聞くのだった。往年の信濃守是憲に帰って政事に心ひかれるものも感じたが、今は念仏生活に身を沈めた自分を強く確信する遊蓮房円照であつた。

つた。

いや、第二の目的もあつた。

あとで知つたのだが、花山院の明眸貴子である。老阿闍梨は彼女が早乙女であつたころから、ひそかに想いを傾けていたらしい。

しかし貴子は、花の蕾がひらく季節に後白河法皇に見染められて、院へあがつた。寵愛を一身に受けた。

遅ましく色好みの法皇だったが、それだけに心うつりも激しかった。やがて貴子の房室へ忍んでこられなくなった。そればかりか、四年ほど前のある晩にこんな話を持ち出したのである。

「昔からそなたを懸想してきた高僧がいる。そなたも年だ。身を固めて、後生を頼わねばならない」

年だと言われても未だ二十二歳、いわば女盛りである。

もともと当時の女盛りは十七、八、二十歳をこえると宮廷では姥桜扱いにされた。法皇の言葉はかならずしも突飛ではない。

「どこのお上人さまでしようか」

「顔見知りのはずだ。叡山の阿闍梨皇円だ」

「あ、あのお上人」

そんな眼を、早乙女のころ、感じてはいた。それにしてもあの高齢の阿闍梨さまが――

「全身これ、ご仏体のような阿闍梨だぞ。ちぎって頂くことだけで、そなたの身体が清められる」

「父は、そのことで何か申していたでしょうか」

「この話はな、じつは忠雅公からの願いだっただ」

父の意志では何とも致し方がない。

それに、貴子も父忠雅が置かれた政治的立場に盲目ではな

かった。

そもそも自分を法皇にさし出したこと自体が、立身が目的だったのだ。法皇の寵がさめはじめたと察して、一刻も早く娘を引取るのが政治の要道というものである。

ただしこれだけの配慮をしたにもかかわらず忠雅の太政大臣在位はわずか二年、平清盛の圧力で基房にその地位を奪われ、基房自身もまた一年足らずで、清盛に退けられている。

とにかく藤原貴子は、院をさがると花山院邸の一角に棲むようになった。池のほとりに建つ方円の堂で、そこは書庫だった。ということは花山院邸を訪問する皇円阿闍梨がいつも寝泊りして、史料をひもとく場所だったわけである。

九十歳になんなんとする老軀であった。全身がすでに御仏体、と法皇はおっしゃったが、貴子には到底信じがたかった。それこそなまなましい俗な人間の手が、昼間と言わず夜と言わず、女体を愛撫しつくしてやまないものである。

皇円阿闍梨。

肥後の国守、藤原重兼の息として生まれた。延久五年（一〇七三）だと言われる。父の重兼は栗田関白四代目の裔で、栗田関白とは貴子の家祖である御堂関白藤原道長の実弟にあたる人だから、同門同系の縁者ということになる。

十三歳で比叡山に登山して以来、功德院にこもって研学に

つとめた。たちまち鋭峰をあらわし、三十歳の折はすでに教頭の地位を占めた。「扶桑略記」三十巻を編んだのは、三十五、六歳のころだと伝えられる。

持宝房源光のもとで修学していた法然が、皇円阿闍梨の膝下へ入室したのが久安三年四月、大いにこの碩学から知識を吸収した。また阿闍梨自身も

——われ去夜の夢に、満月の室に入るを見る。今ここにこの俊才を得る。まさにその前兆ならん。法灯いよいよ盛んなるべし。

と、法然の才を愛したと言われる。

藤原貴子の円照への奇怪な述懐は、さらに続く。

比叡山から下山してくるたびにこの老阿闍梨は奇妙な土産ものを、つねにさげてきた。丈長い蛇なのである。これを自ら切り刻んで焼いて、食膳に饗するのである。

「嫌であるうが、吾子（あこ）は眼をつぶっても食さねばならぬ」

と、強制する。

健康のためだけではないらしい。

皇円阿闍梨の言葉によると、現在は末法末世である。救われるのは五十六億七千万年あと、という気も遠くなるような未来である。その折に弥勒菩薩が復活なさって、われわれを

お救い下さる。われわれはどんなことがあっても五十六億七千万年を、生き永らえねばならない。

「五十六億七千万年——」

「そうじゃ」

「この人間が、そんなに長生きできるものでしょうか」

「無論、駄目じゃ。だからせつせとこの蛇を食してな」

「どうなるのでございますか」

「われわれ自身が蛇となるのじゃ」

「まあ……」

「あの池底にひそむ大蛇なら、間違ひなく五十六億七千万年生きられる」

うまそうに蛇の肉を食べ終えた老阿闍梨は、全身に精気をみなぎらせて、貴子の方へ遣い寄ってくる。手首をとらえ、ふところへ皺だらけの手をさし入れて、なま臭い息を吐きかけるのであった。



老阿闍梨の願いは、蛇身になって弥勒菩薩が復活なされる五十六億七千万年の後にまで生き永らえることであつた。

この素懷を皇円阿闍梨は、一昨嘉応元年の六月に遂げた。藤原貴子の話によると、その晩、老阿闍梨の求めはとりわけ執拗だった。まるで彼女の身体を抱くのは、今宵が最後だと言わんばかりに裏返し表返して、愛撫をかさねた。

疲れ果てた貴子は、そのまま、まどろんだ。まどろみのなかで、未だ乳房や股をさわっている老阿闍梨の手を感じていた。翌朝、眼がさめたとき、すでに老阿闍梨の姿はなかった。

かたわらの関は空洞だった。

書庫の中をさがし求めた。戸外に出てもみた。

どこにもいない。

貴子は暁方の夢寐（むび）のなかで、たしかに聞いた物音を、不吉な思いでよみがえらせた。

鈍い水音だった。緑の先の古池に何か重たいものが投げこまれたような水音だった。

父の忠雅に告げて、池をさがしてもらった。下人が長い竿で古池を掻きまぜた。何も出て来なかった。

「叡山へ帰られたんじやよ」

父は娘に言った。

情報社会とは縁遠い当時である。まして相手は出家遁世の身である。どこに身をかくして修法しているものか。誰にもわかる道理がない。

それでも貴子は手をつくして、比叡山に老阿闍梨の消息を求めた。どこにもいないという返事だった。

「阿闍梨さまのことだ。身をかくして往生の素懷をとげられたに違いない」

すでにそこで出家している弟は、ややさげすむような眼で、姉を見た。あんな九十を越えた老法師を、あんたは未だ恋慕しているのか。そんなさげすみの眼であった。

歴史の上でも皇円阿闍梨が遷化した日は不祥である。もちろん仏事も行われず、奥津城もない。

皇円阿闍梨が大蛇に変身し、遠江の桜ヶ池の池底に棲息し、じつと五十六億年後の弥勒出世を待ち望んでいるという伝説が残っているだけである。

しかし皇円阿闍梨が姿をかき消した嘉応元年の六月、その翌々年の承安元年を「弥勒私年号」の初見とした史実は、意味深い。皇円阿闍梨に限らず、旧体制の仏教に属してきたこの国の精神界はひたむきに弥勒救済を憧憬したのではなからうか。

蛇身に変化して五十六億七千万年の未来に賭けた老阿闍梨。乱世に苦しむ民衆は早々と承安元年を「弥勒の年」と呼びあげてしまったようである。

「この三年間……」



と、貴子は美しい眉をひそめる。

老阿闍梨の帰りを待ちつづけた。愛慾なぞ全くまじっていないと、彼女は断言する。生死の問題を見きわめたいのである。

「妾が阿闍梨さまの後生を、じっと考えておりますと、天井の梁に動く者がいるのです。長ものでございます。決して危害を加えようとは致しませぬ。何かを妾に語りかけるような、また妾ともどもに考えこむような眼で、見つめてくるのです」

「それでなぜ此処へわしを訪ねておいでになった」

先夜のことだ。父の忠雅が近ごろふさぎどおしの娘の身を案じてか、琵琶法師の生仏を招じてくれた。貴子とは院にいたときからの顔馴染みであつた。いま生仏には女人の顔は見えない。声馴染というところであらう。琵琶のあと、

「資時さまが何の前ぶれもなく、あなたのお話をなさいました」

「どのような話をしたのか」

「この世をお救い下さる人はこのお山広谷の遊蓮房さましかいらつしやらないとおっしゃったのでございます」

「あの盲目の若者とは、一面識しかない。それと仏法の話をしたわけではない。むしろ資時の方から弥勒の救いを語りか

けてきたんだぞ」

「ああしてご不自由な身体のお方でございます。直感がとりわけすぐれていらっしゃるんじゃないでしょうか」

「困ったな……」

と、円照は板葎の外へ眼をやった。すでに黄昏の気配が、谷底に這いわたってきている。

「阿闍梨さまは、ほんとうに蛇身に変身なされたのでございましょうか」

「……」

「人間のこの身では救われず、蛇身のみが弥勒さまのお救いに出会えるのでしょうか」

円照のおもわくなぞ全く無視して、ひたむきに道を求めてくる貴子だった。

「馬鹿な……蛇が救われて、人間が駄目だなぞという法があつてたまるか」

「どうやったら救われるのでしょうか」

「ゆっくり話して聞かせたいが……もう日が暮れてきた。今宵、どうするつもりか」

「どうするつもりとは……得心のまいったお話をうかがえば、都へ戻ります」

「この山道、まして夜を女人のひとり歩き。そんな真似がで

きると思うか」

「では？」

「致し方がない。ゆっくりと此処に泊ってゆくことじゃ」

円照も腹をきめなければならなかった。

この庵室でこの刻限、まっ先になすべきことは夕餉の仕度であつた。

円照は信西邸で信濃守として暮したころから芋粥が好物だった。だから此処広谷へ隠棲しても米と芋は欠かしたことがない。貴族生活唯一の名残りである。

石をつみ上げたカマドの前にしゃがむと柴を燃しはじめた。

「お粥を作るんですね」

貴子がかたわらに來て立った。

「芋を先に煮こむ」

「妾がやります」

「おぬしは向うで休んでいられよ。小なりとも此処は僧坊だ。すべては僧の仕事である」

「妾も、すでに尼になっております」

「尼に——」

円照はハッとなって女人を見上げた。しかし美しい黒髪はもとのままだった。

「黒髪の尼僧か」

「心はひたむきに仏を求めております。尼僧と申しても差支えはございませんまい」

凜乎とした声だった。

そのとおりである。心さえ純粋な求道者であれば、形はどうだってかまわぬであろう。逆の姿の方が、どれほど呪わしいことか。

芋粥と菜の塩漬けだけの、つつましい夕餉だった。しかし心あたたかい満腹感で円照はみたされた。

ふと信濃守のころ、平清盛の娘とすごした四カ月足らずの新婚の日を思いうかべた。

あのころは幸福であった。夜ごと満ち足りた思いで、美しい幼な妻を眺めたものだ。

しかし父が獄門に梟されたあと、新居を覗いてみたが、すでに幼な妻は消えていた。手まわりの道具類まで持ち去られていた。

あのころだと、夕餉のあとは夫婦そろって帳台へあがる。薄布でおおわれた闇である。

この庵室、帳台こそないが、囲爐裡の西側には厚い簾が三枚かさねてある。そこへ夜具を敷いて、残り火のほとぼりに身をぬくめながら静かに眠ることができる。

今夜はどうするのか。

夜具は一式しかなかった。かりに簾の一枚は分けてもらっても、この方丈一室では彼女の寝顔をすぐかたわらで眺めなければならぬ。

「夜具はここにある。少々男臭いだろうが、我慢してくれ」
「円照さまは？」

「わしはな、このすぐ先に義信房という私僧が庵を結んでおる。そこへいつて眠る」

「よろしいのですか」

それしか方法がないではないか。

などと悪態をつく気にはなれなかった。やはり彼女は歓迎すべき客だったのである。すすんで闇を提供しても全く苦にはならない。

庵を出た。西山の夜気は泌みるように冷めたい。

円照は庵の裏から藁の束を持ち出してきた。軒下の、カマドの前にそれをつみ上げた。身を横たえると、ふっくりと暖かだった。

心地よく眠れそうだが、満ち足りた眼で夜空を見上げる。今宵も月が、鮮かな輪廓を描きだしている。

美しい女性に宿を提供してやること、やはりそれは男にとって幸福な奉仕なのである。

ひととおりの説法だけでは、藤原貴子は得心がいかなかった。本格的な修法を積みたいと申し出た。

浄土の三部経の講義。写経。そして念仏。隙間のない修法生活が遊蓮房の庵室でくり返された。男でも女でもない。師と弟子ですらなかった。円照は彼女を指導することで、自分の念仏への信仰がいつそう強まるのを、自覚できた。

隙間のない修法生活の締めくくりは芋粥である。近ごろ貴子はこの食膳に美味な飲み物を添えるようになった。

「これは何で作った汁じゃ」

円照は一口ふくむと胸先が洗われる思いで、芋粥への食慾がいちだんと増すこの濃緑色の汁を不思議がった。

「妾が草イチゴやグミの実に山梨を勝手にすりつぶしてこしらえたものでございます」

「それだけではあるまい。身体中があたたまってくる。これは何のせいじゃろう」

「ほんに、妾も曉方なぞ夜衣を剥いているほどにあたたまります」

日ごとに寒さはつのってゆくはずなのに、軒下の薬床はぬくかった。

「水をまぜるのか」

「はい」

「谷の流れからか」

「いいえ。この下に大きな栃の木がございますでしよう」

「ある、二抱えもあるあの栃だな。夏になると、蜂が一杯にやってきて巣を作る」

「丁度妾の手が届くあたりに、洞ができております。そこにたまった水、たいへん甘い味が致します。だからそれを掬ってきてまぜるのでございます」

「猿酒かも知れんな」

その晩も円照は猿酒に気持良く酔った。芋粥をたっぷり食べると、カマドの前へ去った。薬をつみあげて、じきに正体もなく眠りこんでしまった。

眼がさめたとき、月のない晩で、厚い闇がとざしてはいたが、その奥で人影を見分けることができた。

夢うつつか、としはらくは眼を疑ぐっていたが、やはりまぎれもない実像であった。かぼそい人影である。

「円照さま」

「おぬしだったか」



「義信房さまの庵へいつて眠るなどと、嘘でございましたのね」

「知れたか……義信房はそんな親切な男ではない」

「貴子は恨みに思います。あの夜以来あなたはずーっと妾のためにこんな寒い戸外でやすんでいらしたのですか」

「猿酒のおかげでいささかも寒さなぞ感じぬ」

「さあ、室内へおはいり下さい」

「それは困る」

「いけません。それでなくても円照さまはいつもお風邪気味の身体。妾はいっこうにかまいません。囲爐裏の端でおやすみ下さい」

「おぬしはかまわんでも、わしが困るのじゃ」

「なぜ——」

「わしも男じゃ」

「男になられても、いっこうにかまいませんぬ」

きっぱりと言いきった。

これはどんな謎をかける言葉なのだろうか。

しばらく押し問答をかさねたが、結局円照は室内へはいった。

密室のなかでの女性は、想像もつかぬほど大胆になるものだ。囲爐裏をはさんで向う側に横たわろうとする円照をおさ

えた。自分の寢床にさし招くのだ。

「夜衣のなかへおはいりにならなければいけません」

「さっきも申したように、そんなことをすると、わしは男になる」

「男になって下さいませ。荒びた殿方になって下さいませ」

「そんなことをしたら……」

「でも円照さまはおっしゃったではございませぬか」

「何を」

「心にさえ仏を見失わなければ、形はどうあってもよい。円照さまと妾とが、ここで結ばれても、それが仏道のさまたげにはならないのでございましょう」

眼が迫ってくる。黒髪から匂う香ぐわしい女臭に圧倒される。うす衣の下で、四肢が哀しい線をえがいている。

女の哀しさ——それは理性のすべてを克服してしまう複雑な女体の構造と言うべきであらうか。あまりにも深い甘美なエネルギイが彼女のすべてを奪いつくしてしまうのだ。

貴子自身が最初に負けて、そのすぐあとで円照がこの甘美なエネルギイで焼きつくされてしまった。

「わしは、仏を忘れた。弥陀の尊像を見失った」

歡樂のあと、円照は夜衣から転ろがり出て絶叫した。

「そんなこと、ございせんわ。さあ、ここで声をそろえて

お念仏を」

「おぬしには、それができよう。わしにはできない」

「なぜでございますか」

むしろ晴れ晴れとした表情で貴子は訊きかえしてくる。

「おぬしには、わかるまい。女体だからなのだ。男が女体を求めるとき、彼の心はまっ黒に焼けている。どんな色彩をも受付けぬ黒さなのだ」

「女は……」

「女体もかなしい。しかし女体は受容するだけなのだ」

「受容するだけ……しかし妾は、さっきすべてを忘れて円照さまが欲しかったのでございます。受容などといった閑雅なものではございせん」

再び円照は夜衣のなかへ身を戻していた。無言で、力の限り貴子を抱きしめていた。

折れて砕かれてしまいうるやわ肌には、いくら吸っても吸いつくせない甘美な薬液がたたえられていた。

(つづく)

浄土宗の宝物

「桜と小禽図」

横浜小机 泉谷寺

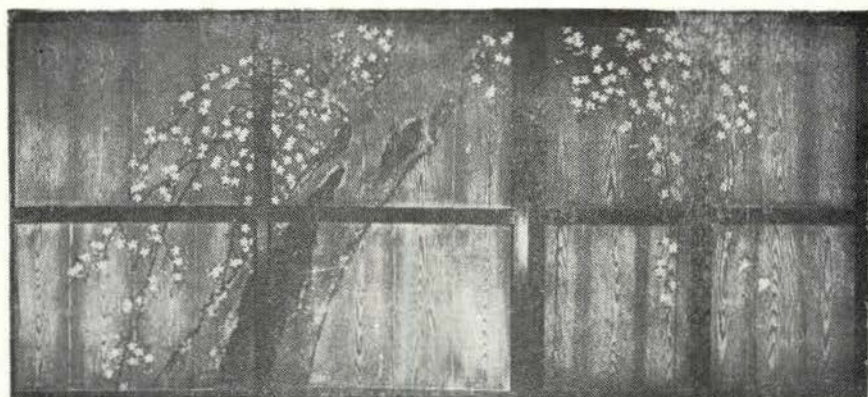
泉谷寺は横浜市港北区小机にある浄土宗の寺である。室町末期の一五二三年、名蓮社見譽号阿悦公の開山で領主二宮織部正の父の菩提のために建立されたことに始まる。江戸時代には末寺百ヶ寺余りを有し関東触頭三カ寺の一として発展、一時期には檀林となったこともある。また特に葵の紋を附すことも許された由緒ある寺でもある。

この泉谷寺に杉戸八枚に安藤広重筆による「桜と小禽図」がある。広重といえは江戸期の浮世絵師で「東海道五拾三次」で有名であるが、ここに紹介する図は広重の

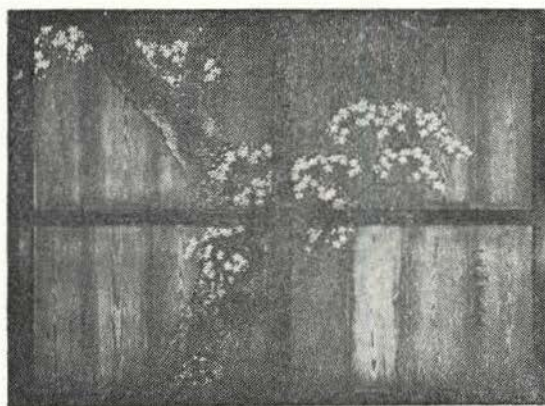
作品の中でも特別なもので花鳥画中最大の作品である。縦二〇九センチ×横八八五センチの大画面に肉筆で山桜に遊ぶ小鳥を描いたもので、均衡のとれた格調高い浮世絵最大の力作ともいえるものである。

天保六年当寺二十五世として立誓了信が住職に就任した。了信と広重は親戚関係にある。了信は広重の三人姉妹の一人、さだの婿だといわれ、さらに了信の娘お辰は広重の養女となって、二代広重の妻となっている。こうした親戚関係から再建間もない泉谷寺に了信が入寺したことによって広重が祝として描いたものであろう。了信も広重の花鳥画「月に桃と燕」・「桜と小禽」の賛に「和漢朗詠集」の詩句を書いているように親密な関係にあった。了信は天保六年から同十一年までの住職であったから、広重が「東海道五拾三次」で人気上昇していた時期にあたる。そんなこともありこの杉戸八枚の大画面に描かれた図は力量感にあふれ、かつ広重画風を一段と掘り下げた味わい深いものがある。いわば広重の完成された境地をここに見ることがができる。

(佐々木洋之)



↑ 右 4 枚の図



桜と小禽図

横浜泉谷寺藏

← 左 2 枚の図

「浄土」購読規定

一部 定価 百三十円

(送料十二円)

会費一カ年金一、五〇〇円

(送料不要)

浄土 十月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和四十九年九月二十五日 印刷
昭和四十九年十月一日 発行

定価 百三十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関一三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人讃仰会

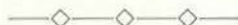
電話東京二六二局五九四四番

〒一〇二 振替東京八二一八七番

開宗八百年慶讃

『仏前結婚式』 井原文雄 編

わたし達、浄土宗山口教区協議会を結成いたしました三年になります。二度と会えない法然上人の開宗八百年のよき年にあたり今日の仏教界は葬儀同様、若い人々の心をつかむ上に仏前結婚式が大切なことではないかと思ひます。そこで、瑞相寺住職、総本山知恩院宿老井原文雄上人に執筆をお願い致しましたら、ご多忙にもかかわらず、心よく引受けていただきました。ここに感謝の意を表し、願わくは、一人でも多くの寺院がご利用いただければわたし達会員の無上の光栄と存じます。



残部が少しありますので、ご入用の方は実費 200 円にておわけいたします。
(但しなくなりましたらお許し下さい)

発行所 〒740 岩国市今津町 6-12-5 称名寺内

山口教区教職員協議会

TEL (0827) 21-0826

浄土宗開宗八百年記念トラクト

『法然上人と浄土宗』

B6判 96頁 定価 180 円 (〒 70円)

(200部以上 単価160 円 送料実費)

内 容

第一編 法然上人のあゆみ

第二編 浄土宗のおしえ

第三編 信徒の心得

附 法然上人略年譜・参考文献

開宗八百年の聖辰を迎えました。本会ではこの慶祝を期しトラクトを作成いたしました。檀信徒用施本・慶讃法要記念品などとして広くご利用下さい。

〒102 東京都千代田区飯田橋 1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (03) 262-5944 番